Ceftizoxime と各種抗緑膿菌用抗菌剤の in vitro および in vivo 併用効果

横田 好子·池田 文昭·峯 靖 弘 藤沢薬品工業株式会社開発研究所·

(平成元年6月30日受付・平成元年8月21日受理)

Ceftizoxime を中心に amikacin, tobramycin, isepamicin, piperacillin, ticarcillin, aztreonam および carumonam との併用効果について Pseudomonas aeruginosa, Escherichia coli および Klebsiella pneumoniae に対し, in vitro および in vivoで検討した。

- 1) In vitro における MIC および FIC index の検討結果, amikacin, piperacillin および aztreonam が ceftizoxime と優れた併用効果を示した。殺菌作用では ceftizoxime は P. aeruginosa に対し amikacin と, E. coli および K. pneumoniae に対し amikacin, piperacillin あるいは aztreonam と相乗作用を示した。
- 2) マウス感染実験において *P. aeruginosa* および *E. coli* に対し, ceftizoxime と amikacin との併用は相乗ないし相加作用を示したが, piperacillin あるいは aztreonam との 併用は不関であった。
- 3) ヒトの常用投与量によって得られる血中濃度に simulate した $in\ vitro\$ 殺菌作用において、ceftizoxime と amikacin の併用は $P.\ aeruginosa$ の再増殖を長時間抑制することができた。 $E.\ coli$ に対しては amikacin および aztreonam との併用は殺菌時間を短縮したが、piperacillin との併用は効果が認められなかった。

Key words: Ceftizoxime, 併用効果, In vitro, In vivo

近年の医薬品の開発および医療技術のめざましい向上は 基礎疾患を有する患者に福音をもたらした反面、宿主の感 染に対する抵抗力の低下した compromised host の増加を もたらしているといえる。こうした感染防御能の低下した 宿主においては Pseudomonas aeruginosa をはじめとす る弱毒菌や真菌が重症感染症へと発展する結果となること は多くの臨床報告例にみられる通りである。那須1)らの報 告によれば敗血症の起因菌は P. aeruginosa と Staphylococcus aureus が最も多いことを示しているが, 剖検肺からの検出率は圧倒的に P. aeruginosa が多いこと が挙げられている。また永井2)らは造血器疾患に併発する 感染症の起因菌として Escherichia coli の他に Enterobacter cloacae および Serratia marcescens を検 出したと報告している。感染予防あるいは術後感染予防を 目的とした抗菌剤の投与は一般に first choice として第三 世代セフェム剤のような抗菌力の強い薬剤の使用を避ける べきとされるが、好中球数の減少を伴う免疫低下宿主では 感染発症率が高く,一旦感染すると重篤になり易いため強 力な化学療法によって確実に感染を予防することが重要と なる。そこで本実験では抗菌スペクトラムの拡大および活

性の増強を目的として P. aeruginosa を除くグラム陰性桿菌に強い抗菌活性をもつ ceftizoxime を中心に、緑膿菌に抗菌活性を有する各種抗菌剤との併用を in vitro および in vivo で検討した。

I.実験材料および方法

1. 使用菌種菌株

当研究所保存および 1987 年から 1988 年に分離された Pseudomonas aeruginosa, Escherichia coli および Klebsiella pneumoniae を用いた。

2. 使用薬剤

抗菌剤として ceftizoxime (CZX, 藤沢薬品工業株式会社), amikacin (AMK, 万有製薬株式会社), tobramycin (TOB, 塩野義製薬株式会社), isepamicin (ISP, 東洋醸造株式会社), ticarcillin (TIPC, 藤沢薬品株式会社), piperacillin (PIPC, 富山化学工業株式会社), aztreonam (AZT, 日本スクイブ株式会社), carumonam (CRMN, 武田薬品株式会社) を用いた。

3. 使用動物

日本エスエルシー株式会社より入手した ICR 系雄

Table 1.	MIC50 and	MIC ₈₀ of	ceftizoxime	and various	kinds of	antibiotics alone
	or in comb	oination a	gainst clinica	lly isolated	Pseudomo	nas aeruginosa

A		MIC50*		MICao*		Ratio of
Antibiotic		Alone	Comb.	Alone	Comb.	MIC50 Comb./Alone
	AMK	6.25	1.56	25	12.5	0.25
	CZX	100	25	200	50	0.25
A main and a social a	тов	1.56	0.39	50	6.25	0.25
Aminoglycoside	CZX	100	12.5	200	25	0.125
	ISP	50	6.25	100	12.5	0.125
	CZX	100	25	200	50	0.25
	PIPC	12.5	6.25	400	50	0.5
TD 1 2002	CZX	100	25	200	50	0.25
Penicillin	TIPC	50	25	800	800	0.5
	CZX	100	25	400	200	0.25
	AZT	12.5	3.13	25	12.5	0.25
	CZX	100	25	400	100	0.25
Monobactam	CRMN	6.25	1.56	25	6.25	0.25
	CZX	100	25	400	200	0.25

Method: Checkerboard method

Organism: Pseudomonas aeruginosa (20 strains)

Medium: Mueller Hinton agar (Difco) Inoculation: Stamp method (106 cfu/ml)

Incubation: 37°C (20 h)

• MIC : μg/ml

AMK: amikacin, CZX: ceftizoxime, TOB: tobramycin, ISP: isepamicin, PIPC: piperacillin, TIPC: ticarcillin, AZT: aztreonam, CRMN: carumonam

マウス (4週齢 19~21g)を用いた。

4. 実験的顆粒球減少症の作成

非絶食のマウスの腹腔内に用時滅菌生理食塩水で溶解した cyclophosphamide (CY, 塩野義製薬株式会社): 200 mg/kg を投与し, 4日後に顆粒球減少マウスとして実験に使用した³)。

5. 抗菌力測定

日本化学療法学会感受性測定法に従い測定した⁴。 すなわち Mueller-Hinton broth (MH-broth, Difco) で 37°C, 20 時間培養後の被験菌の 100 倍希釈液を, 2 倍稀 釈 系 列 の 薬 剤 含有 Mueller Hinton agar (MH-agar) 平板上にスタンプ接種し, 37°C, 20 時間 培養後,最小発育阻止濃度 (MIC, ug/ml) を判定した。

6. Checkerboard dilution method による併用効果 CZX と併用すべき薬剤の種々の濃度を組合せた平 板培地を作成し、被験菌の 10° cfu/ml を接種し、培養後 MIC を判定した。得られた結果から minimum

fractional inhibitory concentration (min. FIC index) を求めた⁵⁾。min. FIC index より 0.5 以下を相乗作用, 0.5 から 1.0 を相加作用, 1 から 2 を不関, 2 以上を拮抗作用とした。

7. 殺菌作用

P. aeruginosa ATCC 25615 および E. coli 7101 を 37°C, 20 時間培養後, MH-broth に 5 %になるように接種し、37°C, 1 時間振盪培養した。これをさらに 100 倍に稀釈した菌液 (P. aeruginosa: $3.0 \sim 7.1 \times 10^5$ cfu/ml, E. coli: 3.6×10^5 cfu/ml) に各濃度の薬剤を添加し、37°Cで振盪培養し、経時的に反応液中の残存生菌数を測定した。

8. ヒト血清中濃度に simulate した系における *in* vitro 殺菌作用

臨床常用投与量すなわち CZX (2g, 1時間点稿)[®], AMK (200 mg, 筋注)ⁿ, PIPC (2g, 1時間点稿)[®], AZT (1g, 1時間点滴)[®] でえられたヒト血清中濃

Table 2. Mean FIC indexs of ceftizoxime and various kinds of antibiotics in combination against clinical isolates

Antibiotic		Mean FIC index			
Antibiotic		Pseudomonas aeruginosa (20)	Escherichia coli (20)	Klebsiella pneumoniae (20)	
	AMK	0.58	0.71	0.88	
Aminoglycoside	TOB	0.58	0.77	0.66	
	ISP	0.58	0.79	0.81	
Penicillin	PIPC	0.72	0.79	1.05	
	TIPC	1.27	0.62	0.80	
Monobactam	AZT	0.76	0.63	0.69	
	CRMN	0.98	0.75	0.63	

Method: Checkerboard method

Organism: Pseudomonas aeruginosa, Escherichia coli, Klebsiella pneumoniae (20 strains)

Medium: Mueller-Hinton agar (Difco) Inoculation: Stamp method (10⁶cfu/ml)

Incubation: 37°C (20 h)

AMK: amikacin, TOB: tobramycin, ISP: isepamicin, PIPC: piperacillin,

TIPC: ticarcillin, AZT: aztreonam, CRMN: carumonam

度を MH-brothを用いステップワイズに濃度を変化させ、この系に試験菌 (*P. aeruginosa* 6042:6.0×10⁶ cfu/ml, *E. coli* 7107:9.4×10ⁿ cfu/ml) を接種して 37°Cで振盪培養し、経時的に生菌数を測定した。

9. マウス感染実験

P. aeruginosa 26 および E. coli7107 を試験菌に用いた。すなわち所定の菌数を 5%ムチンに浮遊しマウスの腹腔内に 0.5 ml 接種した後 1 時間後に薬剤を皮下投与した。 3 日ないし 4 日間マウスの生死を観察し、生存数からプロピット法により ED_{50} を求めた¹¹¹。単独時に対する有意差検定は併用時に含有されるそれぞれの薬剤との間で行なった。また併用時の ED_{50} から FIC index と同様の計算法で Fractional ED_{50} (FED) を求めた。

II. 結果

1. In vitro 併用効果

CZX との併用剤としてアミノ配糖体 (AMK, TOB, ISP), ペニシリン (PIPC, TIPC) およびモノバクタム (AZT, CRMN) を選び checkerboard 法でMIC と FIC index について検討した。

(1) P. aeruginosa 20 株に対する MIC 50 および MIC 80

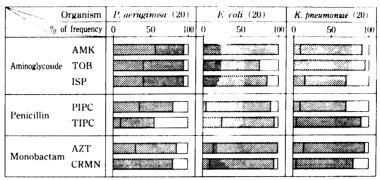
臨床分離 P. aeruginosa 20 株に対する MIC を求めた (Table 1)。

CZX は P. aeruginosa 20 株に対し, 12.5 から 800 μ g/ml の分布を示す株であるが, 4 回の実験で得られた MIC_{50} は 100, MIC_{80} は 200 \sim 400 μ g/ml であっ

た。これに対しアミノ配糖体である AMK. TOB お よび ISP のそれぞれ MIC₅₀ は 6.25, 1.56 および 50 μg/ml であったが CZX との併用でそれぞれ 1.56, 0.39 および 6.25 μg/ml と単独時より 1/8 ~ 1/4 の MIC 値がえられた。同様にペニシリンである PIPC あるいは TIPC と併用した場合の MICso は PIPC で は単独の $12.5 \mu g/ml$ が $6.25 \mu g/ml$ に、TIPC は 50 $\mu g/ml$ が 25 $\mu g/ml$ となった。モノバクタムである AZT および CRMN ではそれぞれ単独の 12.5 µg/ml が 3.13 $\mu g/ml$ に、6.25 $\mu g/ml$ が 1.56 $\mu g/ml$ とな った。またこれらの薬剤と併用した CZX の MIC は 1/10~1/3になった。なお MIC₈₀で表示すると表の 通り全般に並行して低下した。すなわち P. aeruginosa に対し CZX と上記の薬剤の併用はいずれ も単独時に比べ MIC を著しく減少させることが明ら かとなった。

(2) P. aeruginosa, E. coli および K. pneumoniae に対する平均 FIC index と相乗作用の頻度

上記の実験において得られた結果から個々の菌株のFIC index を算出し平均を求めた (Table 2)。 P. aeruginosa 20 株に対するアミノ配糖体の平均 FIC index は 3 剤ともすべて 0.58 であったが,ペニシリンでは PIPC (0.72) のほうが TIPC (1.27) より優れ,モノバクタムでは AZT (0.76) のほうが CRMN (0.98) よりやや優れていた。E. coli 20 株に対してはアミノ配糖体,ペニシリンおよびモノバクタムの 7 剤は FIC index が $0.62 \sim 0.79$ の範囲内にあり,FIC



synergistic effect additive effect no effect

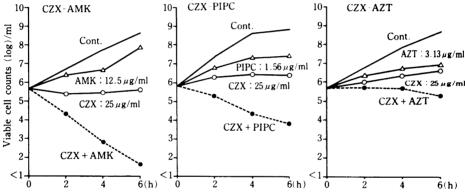
AMK: amikacin, TOB: tobramycin, ISP: isepamicin, PIPC: piperacillin,

TIPC: ticarcillin, AZT: aztreonam, CRMN: carumonam

P. aeruginosa: Pseudomonas aeruginosa, E. coli: Escherichia coli,

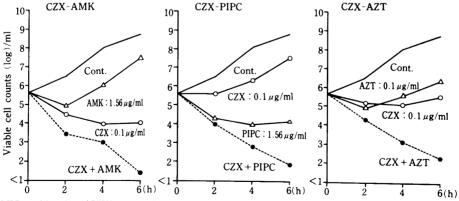
K. pneumoniae: Klebsiella pneumoniae

Fig. 1. Frequency of synergistic effect by ceftizoxime and various kinds of antibiotics in combination



MIC : ceftizoxime (CZX) : $200 \,\mu\text{g/ml}$, amikacin (AMK) : $50 \,\mu\text{g/ml}$, piperacillin (PIPC) : $3.13 \,\mu\text{g/ml}$, aztreonam (AZT) : $12.5 \,\mu\text{g/ml}$

Fig. 2. Bactericidal activity of ceftizoxime and amikacin, piperacillin or aztreonam in combination against *Pseudomonas aeruginosa* ATCC 25619



MIC: ceftizoxime (CZX): $0.2\,\mu\text{g/ml}$, amikacin (AMK): $3.13\,\mu\text{g/ml}$, piperacillin (PIPC): $3.13\,\mu\text{g/ml}$, aztreonam (AZT): $0.2\,\mu\text{g/ml}$

Fig. 3. Bactericidal activity of ceftizoxime and amikacin, piperacillin or aztreonam in combination against *Escherichia coli* 7101

index で見る限りほぼ同等の効果であった。K. pneumoniae 20 株に対しては TOB, AZT および CRMN が, $0.63 \sim 0.66$ の FIC index を示した。

一方,これらの菌種に対して併用効果のあった菌株の出現頻度を Fig. 1 に示した。すなわち P. aeruginosa 20 株に対する AMK との併用は相乗作用が 55%,相加作用が 40%,不関が 5 %で,ほとんどの菌株に対し相乗ないし相加作用であることが確認された。 TOB および ISP においてもその傾向はほぼ同様であった。ペニシリンでは PIPC との併用で 80%の株に対し相乗ないし相加作用が出現したが,TIPC はその出現率が悪く 55%であった。モノバクタムでは AZT で相乗および相加作用が 85%認められたのに対し CRMN との併用では相加作用 (80%) のみであった。 E. coli および K. pneumoniae</code> に対しては各グループの中では AMK,TOB,TIPC および AZT がそれぞれ 比較的良好な併用効果を示した。

以上の抗菌活性の結果から CZX と比較的優れた併用薬となりうる薬剤はアミノ配糖体では AMK, ペニシリンでは PIPC, モノバクタムでは AZT であったので,以下これらの薬剤との併用について検討した。

(3) P. aeruginosa および E. coli に対する殺菌作用 CZX と上記で選択した AMK, PIPC および AZT を併用した時の P. aeruginosa および E. coli に対する殺菌作用を検討した (Figs. 2, 3)。

CZX の MIC は 200 μ g/ml, AMK は 50 μ g/ml の高度耐性を示す P. aeruginosa ATCC25619 に対し CZX の 1/8 MIC (25 μ g/ml) が静菌的に作用したのに対し、

AMKの 1/4 MIC $(12.5\,\mu g/ml)$ では菌の増殖を抑制し得なかったが、CZX と AMK の併用は著しい殺菌を示した。また CZX と PIPC $(1/2MIC, 1.56\,\mu g/ml)$ および CZX と AZT $(1/4MIC, 3.13\,\mu g/ml)$ の併用はともに殺菌力が増強したが、AMK との併用ほど顕著なものではなかった。

E. coli 7101 に対し CZX の 1/2MIC (0.1 $\mu g/ml$) および AMK の 1/2 MIC (1.56 $\mu g/ml$) の併用はそれぞれ単独より強い殺菌作用を示した。また PIPC の 1/2 MIC (1.56 $\mu g/ml$) および AZT の 1/2 MIC (0.1 $\mu g/ml$) との併用においてもいずれも単独に比べ強い殺菌作用を示した。

データを省略したが K. pneumoniae に対する検討では3剤とも E. coli の場合と同様の結果を得た。

2. In vivo 併用効果

P. aeruginosa 26 および E. coli 7107 を試験菌としマウス実験感染に対する併用効果を正常マウスおよび 顆粒球減少マウスで検討した。

(1) P. aeruginosa 26 に対する効果

CZX に $12.5~\mu g/ml$, AMK に $1.56~\mu g/ml$ の MIC を示す株を用いた (Table 3)。正常マウスにおける/ P.~aeruginosa~~26 感染に対し CZX の ED_{50} は 187~mg/kg であったのに対し AMK は 2.63~mg/kg であった。また両剤を 10:1~0割合で投与した場合の ED_{50} は 17.4~mg/kg であったが,この中に含有される CZX 量は 15.8~mg/kg , AMK は 1.58~mg/kg となり CZX は単独投与時より有意に減少し約 1/10~量に,AMK は 1/2~量に軽減することができ相加的作用

Table 3. Protective effect of ceftizoxime and amikacin alone or in combination against *Pseudomonas aeruginosa* infection in normal and granulocytopenic mice

A -aibisais		ED ₅₀ (mg/kg)		
Antibiotic		Normal mice*	Granulocytopenic mice**	
Alone	CZX	187	>200	
	AMK	2.63	3.48	
Combination	CZX-AMK (10:1)	17.4 (0.68)#	11.8 (0.36)#.##	

Mouse: ICR, Male, n=8

Organism: Pseudomonas aeruginosa 26, i.p. challenge (5% mucin suspension)

* 5.0×10^6 cfu/mouse, ** 8.0×10^4 cfu/mouse

Therapy: s.c. injection, 1 h after challenge Observation: 3 or 4 days after challenge

(): FED index

Significant difference from alone (#: CZX, ##: AMK, P<0.05)

CZX: ceftizoxime, AMK: amikacin

Table 4.	Protective effect of ceftizoxime	and various kinds of antibiotics
	alone or in combination against	Escherichia coli infection
	in normal and granulocytopenic	mice

		$ED_{50} (mg/kg)$		
Antibiotic		Normal mice*	Granulocytopenic mice**	
	CZX	0.324	0.914	
Alone	AMK	1.32	3 90	
	PIPC	>15	68.4	
	AZT	0.160	0.496	
Combination	CZX-AMK (10:1)	0.245 (0.70)**	0.326 (0.33)**	
	CZX-PIPC (1:1)	0.630 (0.99)**	2.66 (1.48)**	
	CZX-AZT (1:1)	0.273 (1.58)	1.16 (1.80)	

Mouse: ICR, Male, n=8

Organism: Escherichia coli 7107, i.p. challenge (5% mucin suspension)

* 6.0×10⁶ cfu/mouse, ** 7.0×10⁴ cfu/mouse

Therapy: s.c. injection, 1 h after challenge Observation: 3 or 4 days after challenge

(): FED index

Significant difference from alone (* : CZX, ** : other drug, p<0.05) CZX : ceftizoxime, AMK : amikacin, PIPC : piperacillin, AZT : aztreonam

(FED: 0.68) であることが示された。一方,CY 処理による顆粒球減少マウスにおける感染に対してはCZX の EDsoが>200 mg/kg,AMK が 3.48 mg/kgと正常マウスに比較してそれぞれ治療効果は低下したものの CZX と AMK の併用時の EDsoは 11.8 mg/kg(CZX: 10.7 mg/kg,AMK: 1.07 mg/kg)とそれぞれ 1/20 量および 1/3 量に軽減が可能で共に単独投与時に対し有意差が認められ,FED index でみると 0.36 と相乗的作用であった。

(2) E. coli 7107 に対する効果

CZX に $0.2~\mu g/ml$, AMK; $3.13~\mu g/ml$, PIPC; $3.13~\mu g/ml$, AZT; $0.2~\mu g/ml$ の感受性を示す E. coli 7107 を用い検討した (Table 4)。

正常マウスに対する CZX の ED₅₀ は 0.324 mg/kg, AMK: 1.32 mg/kg, PIPC: >15 mg/kg, AZT: 0.160 mg/kg であるのに対し CZX と AMK の 10: 1 の併用は 0.245 mg/kg (FED: 0.70), CZX と PIPC の併用は 0.63 mg/kg (FED: 0.99) とそれぞれ相加作用が認められたが、AZT との併用は不関 (FED: 1.58) であった。一方、顆粒球減少マウスの感染に対しては AMK との併用においてのみ相乗作用が認められたが、PIPC および AZT との併用では 不関であった。

3. ヒトの血清中濃度変化系における in vitro 殺菌 作用

(1) P. aeruginosa に対する効果

臨床における有効性を推測するために抗菌作用および殺菌作用において相乗作用の認められた CZX と AMK を用い、CZX の臨床常用量である 2 g 1 時間点滴を 6 時間間隔で 2 回実施した時の血清中濃度推移と AMK 200 mg/kg を 6 時間間隔で 2 回筋注時の血清中濃度推移を MH-broth で再現し、P. aeruginosa 6042 を接種し経時的に生菌数を測定した (Fig. 4)。

CZX は投与1時間後に124 μ g/mlをピークに徐々に消失し6時間後7.6 μ g/mlが存在する濃度変化系において P. aeruginosa (MIC:CZX:50 μ g/ml, AMK:12.5 μ g/ml) は増殖も減少もせず静菌的状態が継続した。これに対し AMK は1時間後に9.8 μ g/mlをピークとし,その後ゆるやかに減少し,6時間後に1.8 μ g/mlが残存した濃度変化系において菌数は時間の経過とともに著しく減少したものの6時間後の再投与にもかかわらず菌数はさらに著減することはなかった。またそれぞれの薬剤を組合せた2剤の濃度変化系において菌数は6時間まで AMK 単独と全く同じ挙動を示したが,8時間以降12時間まで菌を検出しなかった。

(2) E. coli に対する効果

臨床常用量 (CZX: 2 g, AMK: 200 mg, PIPC: 2 g, AZT: 1 g) の一回の投与モデルを設定し *E. coli* 7107 を高量接種して検討した (Fig. 5)。

CZX は本菌に対し一過的に MIC の 600 倍以上の濃度と接触する時点もあり殺菌作用は顕著で 4 時間後には菌を検出しなかった。これに対し AMK は最高時で 3 倍の MIC の接触があるものの殺菌作用は弱く 5時間までに約 3 オーダの菌数が減少した後は徐々に増加した。これに対し両剤の併用は CZX 単独よりもさらに殺菌時間は短縮し 2 時間後には菌を検出しなかった。 PIPC は最高濃度は $84~\mu g/ml$ (1 時間,約 26 MIC) となるが,菌の消失は緩慢で 8 時間にわたりゆ

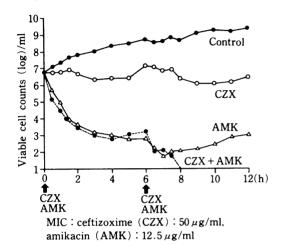


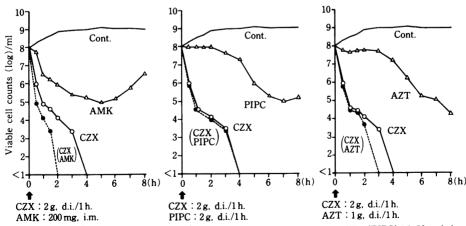
Fig. 4. Bactericidal activity of ceftizoxime and amikacin in combination against *Pseudomonas aeruginosa* 6042 in an *in vitro* model simulating human serum levels

CZX: 2 g, d.i./1 h. AMK: 200 mg, i.m. るやかな菌数減少が認められ、CZX との併用においても CZX 単独の効果を越えることはできなかった。 AZT の最高濃度は 93 µg/ml と約 465 MIC に達するにもかかわらず菌数の減少は顕著ではなく 8 時間までゆるやかな減少をつづけたが CZX との併用は殺菌時間をより短縮することができた。

以上の結果から P. aeruginosa に対し CZX は AMK と協力して再増殖を長時間にわたり抑制し、E. coli に対しては AMK および AZT との併用で殺菌時間を短縮することができた。しかし、PIPC に対して協力効果は得られなかった。

III.考 男

顆粒球減少宿主は往々にして敗血症を併発するケ ースが多く血液材料からの分離状況をみるとグラム陽 性球菌とならんで P. aeruginosa および E. coli が多 いことが挙げられる。CZX は P. aeruginosa に対し 12.5~800 ug/mlの中等度ないし高度耐性を示す が,アミノ配糖体,ペニシリンおよびモノバクタムと の併用により MIC_{50} は $1/4 \sim 1/8$ になった。またア ミノ配糖体 (AMK, TOB, ISP) は 1/4 ~ 1/8 に, ペ ニシリン (PIPC, TIPC) およびモノバクタム (AZT, CRMN) においてもそれぞれ MIC₅₀ は $1/2 \sim 1/4$ に なることが明らかとなった。ただ PIPC および TIPC は P. aeruginosa に対し単独での抗菌力が強くないた め CZX との併用において抗菌活性は期待する程増強 されなかった。P. aeruginosa に対する短時間内殺菌 作用はそれぞれ単独では殆ど活性を示さない CZX の 1/8 MIC および AMK の 1/4 MIC の併用で顕著な殺 南作用が確認された。さらにヒト常用投与量の血清中



MIC : ceftizoxime (CZX) : $0.2\,\mu\text{g/ml}$, amikacin (AMK) : $3.13\,\mu\text{g/ml}$, piperacillin (PIPC) : $1.56\,\mu\text{g/ml}$, aztreonam (AZT) : $0.2\,\mu\text{g/ml}$

Fig. 5. Bactericidal activity of ceftizoxime and amikacin, piperacillin or aztreonam in combination against *Escherichia coli* 7107 in an *in vitro* model simulating human serum levels

濃度を simulate した系における CZX と AMK の併 用においては AMK 単独で認められた再増殖を長時 間にわたり抑制することができた。 in vitro における これらの殺菌活性の増強はマウス感染実験に充分に反 映されており P. aeruginosa 感染に対する AMK の使 用量は理論的には約 $1/2 \sim 1/3$ 量に軽減することが可 能となる。さらに E. coli 感染に対してはより少量で 同等の効果が得られることが明らかとなった。ただ注 意すべきことはアミノ配糖体は一般に血中濃度は持続 するもののピーク濃度は低いという特徴を持ち起因菌 によっては MIC レベル以上の濃度に達することが困 難な場合もある。したがって heterogenous な cell 分 布をもつ弱毒菌においては低濃度の作用によって耐性 cell が選択され易いことが考えられる。たとえば Fig. 5の E. coli 7107 の実験で AMK 単独作用 7 時間目の 反応液中から得られたコロニーについて AMK に対 する MIC を測定した結果, 反応スタート時 AMK に 3.13 μg/ml の感受性をもっていた親株が反応後 20 コ ロニー中 18 コロニーが 12,5 μg/ml の感受性となり, 残り2コロニーは $6.25 \mu g/ml$ であった。すなわち、 Fig. 5 における AMK 作用時の再増殖は薬剤の作用 によって明らかに耐性 cell が選択された結果である ことが示された。

第37回化学療法学会の抗菌薬投与計画シンポジウ ムにおいて戸塚12)らはβ-lactam剤の効果は血中濃度 の MIC を上回る時間が治療効果に影響し、アミノ配 糖体は MIC 以上の血中濃度の AUC に相関すると発 表している。アミノ配糖体の殺菌活性は濃度に比例 し、1/4 MIC 以下では殆ど殺菌活性を示さないが、 B-lactam 剤は sub MIC の低いレベルにおいても静菌 的作用を示すことからアミノ配糖体は分割せずに投与 し、β-lactam剤は MIC 以上の血中濃度が維持される ような分割投与が良いとしている。確かに高い血中濃 度が得がたいアミノ配糖体の特性から来る耐性 cell の選択等のことも考慮にいれるならばアミノ配糖体は 一回の投与量を減量するのではなく、CZX との併用 によって投与間隔をあけ回数を減らすことが副作用軽 滅につながり長期投与を余儀なくされる重症患者には 有用な方法であろうと考えられる。一方, β-lactam 剤同士のマウス感染実験において我々は同時期に2剤 投与を実施し併用効果を認めなかったが、戸塚12)ら の理論に従い両剤を時差投与し有効血中濃度を持続さ せたならば良い治療効果が得られたかもしれない。

本実験の結果では in vitro MIC および殺菌作用を みる限り P. aeruginosa, E. coli および K. pneumoniae に対し CZX と AMK, PIPC および AZT との併用は比 較的高率に相乗ないし相加作用が認められたが、マウス感染実験における限定された投与法では CZX と AMK の併用が最も良いという結果を得た。さらに正常マウスの約 1/100 の菌量の接種における顆粒球減少マウスの感染において各種抗菌剤の EDsoが正常マウスの単独投与に比べて一様に約 3 倍の効果が低下した。しかしながら PIPC および AZT は別として CZX と AMK の併用効果は E. coli および P. aeruginosa 感染に対し、正常マウスの併用時の効果に比べ低下することはなかった。

島田18) らは尿路分離の P. aeruginosa 54 株に対し CZX と AMK の併用は平均 FIC index が 0.53 で相 乗作用の頻度は41%であったとしている。また Scribner 14) らの報告では cystic fibrosis より分離され た P. aeruginosa 60 株に対し AMK と PIPC は 53% の割で相乗作用を示したが、β-lactam 剤同士では 10%前後と頻度が低かった。β-lactam 剤とアミノ配 糖体の併用は β-lactam 剤の細胞壁合成阻害がアミノ 配糖体の菌体内への透過性を良好にするものと考えら れ、競合阻害作用による β-lactam 剤同士の併用より も異なった作用点をもつ薬剤の併用の方が相乗作用の 出現頻度が高いという報告が一般に多い15~18)。また ある種の β-lactam剤の併用では β-lactamaseの誘導 により in vitro および in vivo において antagonism が出現することが知られているが、本実験に用いた薬 剤の組合せでは antagonism は観察されなかっ た19~21)。一方, 臨床例22)では P. aeruginosa による 難治性呼吸器症に対する PIPC とアミノ配糖体の併用 療法の臨床有効率は PIPC 単独が 41.7%であったの に対し、TOB との併用は58.3%, NTL との併用は 57.1%と有意差で併用群が優れる成績が得られてい る。ただ岡野23) らは LMOX と TOB の併用療法にお いて臨床無効例より分離された P. aeruginosaに対し in vitro では相乗作用がみられたとしている。

このように複雑な宿主背景をもつ臨床効果はin vitro および in vivo 実験の成績を直接反映するとは限らないが起因菌の消失が治癒への第一ステップである以上,やはり抗菌スペクトラムおよび抗菌活性の増強が期待できる併用療法は重症感染症に対して今後も検討されるべき手段だと考えている。ただ沢山の薬剤が氾濫する現在,我々基礎研究の立場からは各種の評価モデルを用い各種薬剤の組合せにおいてより有用と思われる併用薬の情報を理論的根拠に基づいて提供することが直接的間接的に医療に役立つことができると考えている。

献

文

- 1) 那須 勝,後藤陽一郎: Compromised host 感染 症における臨床細菌学。最近医学 42 (6), 1125 ~ 1132, 1987
- 2) 金丸昭久,永井清保,正岡 徹,柴田弘俊,木谷 照夫,谷口信博,堀内 篤,長谷川広文,川越裕 也,平田充彦,岡本緩子,藤竹英樹,米沢 毅, 金山良男:血液疾患に合併した重症感染症に対す る Ceftizoxime の臨床効果と安全性の検討。 J. J. Antibiotics XXXVII-1,140~148,1984
- 3) 横田好子:実験的免疫低下宿主の感染防御機構と 免疫賦活剤。日細菌誌 39:29~46,1984
- 4) 日本化学療法学会 MIC 測定法改訂委員会:最小発育阻止濃度 (MIC) 測定法再改訂について Chemotherapy 29:76~79, 1981
- 5) Elison G B, Singer S, Hitchings G H: Antagonists of nucleic acid derivates, VIII. Synergism in combination of biochemically related antimetabolites. J. Biol. Chem. 208: 477 ~ 486 1954
- 6) 新薬シンポジウム (ceftizoxime), 第 26 回日本化学 療法学会東日本支部総会、1979
- 7) 新薬シンポジウム (HAPA·B), 第31回日本化学療 法学会東日本支部総会,1984
- 8) 新薬シンポジウム (T-1220), 第23回日本化学療法 学会東日本支部総会,1976
- 9) 新薬シンポジウム (SQ 26,776),第30回日本化学療法学会東日本支部総会,1983
- 10) 村川武雄,広瀬俊治,西田 実:生体内濃度に simulate した *in vitro* model における抗生物質の 殺菌作用 (2). Two-compartment 理論による新 しい gradient 濃度変化 model について。 Chemotherapy 28 (1): 26~30, 1980
- 11) Blass C I (Ed.): Statistics of bioassays.
 Academic Press Inc., New York, 1953
- 12) 戸塚恭一:抗菌薬の投与計画,シンポジウム(治療薬としての抗菌薬投与計画),第37回日本化学療法学会総会,1989
- 13) 島田 剛:緑膿菌に対する化学療法の基礎的検討 一併用療法についてー。Chemotherapy 35 (12): 889 ~ 902, 1987
- 14) RONALD K SCRIBNER, MELVIN I MARKS, ANDREW H WEBER, MARTHA M TARPAY, DAVID F WELCH

- : Activities of various β lactams and aminoglycosides, alone and in combination, against isolates of *Pseudomonas aeruginosa* from patients with cystic fibrosis Antimicrob. Agents and Chemother. 21 (5):939 \sim 943, 1982
- 15) 川原元司:抗生物質の併用療法にかんする基礎的研究, Serratia に対する β-lactam 剤とアミノ配糖体剤の併用。Chemotherapy 35(11):803~816.1987
- 16) 大月秀夫,上 洋司,柴原 健,大槻雅子,西野 武志: Netilmicin セフェム系抗生物質との in vitro 併用効果の検討。Chemotherapy 37 (2): 115~123, 1989
- 17) 甲畑俊郎,金 樹林,藪内英子:非発酵グラム陰 性桿菌に対する aztreonam の試験官内抗菌作用な らびにアミノ配糖体系抗生剤との併用効果。 Chemotherapy 37 (1): 5~14, 1989
- 18) Scudamore R A, Goldner M: Penet ration of the outer membrane of *Pseudomonas aerugi*nosa by synergistic combination of β-lactam and aminoglycoside antibiotics. Antimicrob. Agents and Chemother 21: 1007 ~ 1010, 1982
- 19) 池田文昭, 高乗 仁, 西田 実, 五島嵯智子, 桑原章吾:Cephem 系薬剤間の antagoniam とグラム陰性菌における β-lactamase 誘導について。 Chemotherapy 31 (3): 304 ~ 308, 1983
- 20) CHRISTINE C SANDERS, W EUGENE SANDERS J R : Emergence of resistance to cefamandole: possible role of cefoxitin-inducible betalactamases. Antimicrob. Agents Chemother. 15 (6): 792 ~ 797, 1979
- 21) Kuck N A, Testa R T, Forbes M: In vitro and in vivo antibacterial effects of combinations of beta-lactam antibiotics. Antimicrob. Agents Chemother. 19 (4): 634 ~ 638, 1981
- 副島林造,他:難治性呼吸器感染症に対する piperacillin とアミノ配糖体の併用療法の検討。 Chemotherapy 36 (S-7):55~71, 1988
- 23) 岡野昌彦, 佐藤篤彦, 本田和徳: 持続する緑膿菌 感染のびまん性汎細気管支炎に対する latamoxef と tobramycin の併用療法の検討。Chemotherapy 36(3): 179~185, 1988

IN VITRO AND IN VIVO SYNERGISTIC EFFECT OF CEFTIZOXIME AND VARIOUS KINDS OF ANTIBIOTICS IN COMBINATION

YOSHIKO YOKOTA, FUMIAKI I KEDA and YASUHIRO MINE

Product Development Laboratories Fujisawa Pharmaceutical Co., Ltd., 1-6, 2-chome,
Kashima-cho, Yodogawa ku, Osaka, Japan

We studied the *in vitro* and *in vivo* synergistic effect of ceftizoxime in combination with amikacin, tobramycin, isepamicin, piperacillin, aztreonam or carumonam against *Pseudomonas aeruginosa*, Escherichia coli and Klebsiella pneumoniae.

- 1. The MICs and FIC indexes of ceftizoxime with amikacin, piperacillin or aztreonam were superior in activity to those of each alone. The bactericidal activity of ceftizoxime and amikacin in combination against *P. aeruginosa* was synergistic, and the activity of ceftizoxime in combination with amikacin, piperacillin or aztreonam against *E. coli* and *K.pneumoniae* was also synergistic.
- 2. In treatment against infection with *P. aeruginosa* or *E. coli* in mice, ceftizoxime and amikacin in combination had synergistic or additive effect, but ceftizoxime combined with piperacillin or aztreonam did not.
- 3. In an *in vitro* model simulating human serum levels of ceftizoxime (2g/1h) and amikacin (200 mg, i.m.), ceftizoxime and amikacin in combination markedly inhibited regrowth of P. aeruginosa treated by amikacin alone for a long time. The bactericidal time of ceftizoxime combined with amikacin or aztreonam was shorter than that of ceftizoxime alone, but there was no such effect in the combination of ceftizoxime and piperacillin.